Title	村山順吉氏報告「『子供の領分』をめぐって」（児童における＜総合人間学＞の試み研究）
Author(s)	田澤，薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.2：9-11
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3148
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

児童における＜総合人間学＞の試み　研究
村山順吉氏報告「『子供の領分』をめぐって」

田澤　薫

2011年１月７日、「児童における＜総合人間学＞の試み」研究会の例会が開催された。本学児童学科長の村山順吉氏が、「『子供の領分』をめぐって」と題して、ドビュッシー（Debussy,（Achille）Claude 1862-1918）作曲のピアノ曲「子供の領分」について「子供」という切り口から読み解いたご報告をくださった。

チャペルを会場としたレクチャーコンサート形式の報告は参加者を大いに楽しませ、ピアノ演奏を交えた説明手法に、児童学における楽曲研究の今後の新たな展開が期待された。また報告の最後には、ピアノロールで録音されたドビュッシー自身による「子供の領分」の演奏を聴き味わった。口頭による報告の概要は以下の通りである。

ドビュッシーの「子供の領分」の原題は、英語のChildren's Cornerであり、これを「子供の領分」と訳出した人物とその訳出経緯については調べたが分からなかった。ドビュッシー作品が日本に紹介されたのは比較的早く、山田耕筰らが積極的に取り入れて演奏しており交響詩「海」なども発表されて何年か後には日本での初演をしているが、「子供の領分」の日本初演については分からない。

ただし「子供の領分」と訳出されたこの曲が疑問を持たれずに演奏されている現実をふまえ、この曲の背景を探ってみることにした。

楽譜は、フランスのデュラン社（Durand）から出版されたが、デュランの原典版も非常に間違いが多いことで知られている。研究会での配布資料は、多くのピアノ曲の原典版で知られているヘンレ社（Henle）の版による。他に原典版にはベーレンライター社（Barenreiter）の版もあるが、ベーレンライター版とヘンレ版を比較しても音の入るタイミングで異なる箇所がある。オーソドックスな演奏を聴いた中で、聴きなれた弾き方に近い楽譜を探したところ、今回はヘンレ版であった。こうした事情を踏まえ、日本でも４種類ぐらいの楽譜が刊行されている。最も古いのは安川加寿子版（1960年、音楽之友社）次いで山崎孝版（音楽之友社）、その後、田中希代子版も全音から出版された。10年ぐらい前には新しく中井正子版（ショパン）が出た。

作者のドビュッシーは、大変な影響力のあった作曲家であり、「月の光」のような分かりやすい曲ばかりでなく、非常に分かりにくい難曲も多数発表し音楽の世界に新しい風を吹かせた。1862年８月22日にフランス、サンジェルマンで生まれたたが、特に音楽家の血筋であったわけではない。たまたまショパンの弟子を名乗る女性の目に留まり、その計らいにより10歳ぐらいでパリ音楽院に入学する。ところが音楽院での作曲の授業では大した成果が上がらない。ドビュッシーの感性が、当時の作曲技法に納まらなかったためと考えられる。しかしピアノの伴奏のクラスでは頭角を現した。

「子供の領分」は、以下の６つの小品からなるピアノ独奏用の組曲である。

１．グラドゥス・アド・パルナッスム博士
２．象の子守歌
３．人形へのセレナード
４．雪は踊っている
５．小さな羊飼い
６．ゴリウォーグのケークウォーク

「人形へのセレナード」のみ1906年に作曲され、あとの５曲は1908年の作曲である。組曲「子供の領分」を作っている中に、「人形へのセレナード」を組み込んだというほうが当たっているかもしれない。

この曲の最後には「私の愛する小さなシュウ

シュウに、これらの作品への父の優しい言い訳とともに　クロード・ドビュッシー」とサインがある。シュウシュウとはドビュッシーの一人娘の愛称で、彼女はドビュッシー没後１年で逝去した。献辞からこの曲がシュウシュウのために作曲されたことが分かるが、作曲当時シュウシュウは３歳であることから、シュウシュウが弾くために作曲したとは考えにくい。また、献辞に「言い訳」と書くことは通常ではない。そこで、シュウシュウという愛娘を通して自分というものに向き合った作品であることが見えてくる。

原題は英語であるが、ドビュッシーの作曲したほかの曲は全てフランス語で題がついており、題が英語であること自体が意味をもつと考えられる。ドビュッシーは英語は得意ではなかったが、２度目の妻となったエマ・バルダックが非常にイギリスが好きで娘のシュウシュウの乳母も英国人を頼んだほどであった。ドビュッシーがそうした妻の一種の英国かぶれをからかって英語表題としたという見方をする評論家もいるが、からかったというよりは、ドビュッシーがやはりエマ・バルダックとその娘に心を寄せていこうとしたときに英語という表現方法が出てきたのだろうと考えるほうが自然だろう。６つの小曲の各々にも英語の題がついているが、「象の子守歌」の英語表記は間違っておりジャンボがジンボになっている。「人形へのセレナード」もforとofが違っている。そうした誤記からも、ドビュッシーが英語を使うことは本来の自分が中心になったときには起こり得ないとみてよいだろう。

Children's Cornerという「乳幼児用の囲い」を意味する題を踏まえると、音楽の中で自分の主体性・独自性を持っていながら、「シュウシュウのための囲い」のなかには立ち入らないで上からのぞいているような印象を受ける。作曲技法や和音構成など、もっと踏み込むこともできる場面でぎりぎりの線を越えずに持ちこたえている。シュウシュウに対しては自分のほうが心を寄せていって、父の思いのままシュウシュウの領域に入り込むことは出来ないでいる。それがドビュッシーにして「父の優しい言い訳とともに」という献辞を書かせたのだと思われる。「子供の領分」は、題のつけ方と作曲技法の両方の点で、ドビュッシーが発表していた前後の曲とは、だいぶ雰囲気が違う１つの作品だといえる。

この曲を作った前の状況をたどると、ドビュッシーの身辺の騒がしい時期にあたっていたことに気づかされる。まず歌手のテレーズ・ロジェと婚約して解消され、その翌年には別の愛人が自殺を図り、その４年後にはロザリー・テクシエ、リリと愛称する女性と結婚したものの５年後には、妻の元からドビュッシーは去り、エマ・バルダックと同棲し、その10月に残してきた妻が自殺を図った。エマ・バルダック夫人とは、結婚はしたが穏やかな関係に終始したわけではなかった。当時のドビュッシーは、交響詩「海」、「牧神の午後への前奏曲」等の名曲を発表しすでに世の中に名前が出ていたので、これらのスキャンダルは大きく取り上げられて世間に叩かれ、友人はほとんど彼のもとを去った。そういう中で、「子供の領分」を捧げた娘クロード・エマ・シュウシュウが1905年10月30日に誕生した。婚姻届を出したのは、シュウシュウの誕生から３年たった1908年で、ちょうど「子供の領分」を作曲し終わり、デュランから出版した年と重なる。

村山順吉 児童学科長による報告とピアノ演奏が行われた。

そうすると、「私の愛する小さなシュウシュウに、父の優しい言い訳とともに」の「言い訳」に、何が込められているか少し見えてくるような感じがする。

ドビュッシーは、大変な筆まめで生涯で1,500通ほど書簡が残っている。フランソワ・ルシュール編、笠羽映子訳『ドビュッシー書簡集』（音楽之友社）は、その中の1884年から1918年の書簡の研究書だが、本書に収められた書簡の中にもシュウシュウのことはあちこちに書かれている。例えば演奏会の日に「実は娘の具合が悪いので、私はもうこれで帰ろうと思う」と記すなど、「シュウシュウのためには」という姿が散見される。世間に叩かれている状況の中で、ドビュッシーには、娘に向き合っているときにしか持てない独特の思いがあったと思われる。

次に、とくに以下の２曲について見ていきたい。

１．グラドゥス・アド・パルナッスム博士

実はこの曲より前に、クレメンティ（Clementi）作曲の「グラドゥス・アド・パルナッスム」という練習曲がある。クレメンティはピアノの名手で、多くの練習曲を作り、その100曲の練習曲からなるものが「高い山に登る」意味をもつ「グラドゥス・アド・パルナッスム」という呼ばれ、タウジッヒ（Tausig）がそのうち29曲を編んだ。

ドビュッシーが作曲を始めたころは、タウジッヒが監修した29曲集の方が一般的に子どものためのピアノ練習曲集として使われるようになっていた。これらの練習曲集は退屈で、多くの子どもたちを練習嫌いにさせ、それでも珍重される現状を見て、ドビュッシーは「グラドゥス･アド･パルナッスム」に「博士」をつけて茶化し、「グラドゥス・アド・パルナッスム博士」という曲とした。

譜面の景色は16分音符が続き練習曲と似ているが、同じような音型の継続の途中でその音型がゆっくりになり、練習が嫌になった子どもの気乗りしない姿を表す。それから、最後部ではtrès animé（もっと速く）という表示をつけ、もう曲が嫌になってどんどん速く弾いてパッと終わって「やったー」といった解放感を表現したといわれる。

また「悪魔のコード」とも呼ばれ、調性に不安定さが加わる増三和音が使われている。

さらに、最終部分は、３本のペダルを駆使しないと弾けない和音の一部の消音を要求しており奏法的にも難しい。

２．象の子守歌

ドビュッシーならではの作曲技法と新しい音階を取り入れている。

ドビュッシーがよく使った音階が「６全音音階」であるが、６音すべて全音で構成されている不思議な印象を与えるこの音階が使用されている。ドビュッシーの他の曲における６全音階の使い方は和音構成が複雑で、ドビュッシーの作曲技法の本質はそちらにあると考えられる。「象の子守歌」においては、それ以前に発表された作品よりも６全音階の穏やかな使い方がなされており、シュウシュウの存在がドビュッシーの表現方法を少し洗練させたとも言える。

全曲を通しては、ドビュッシーならではの独特の作曲技法が使用されてはいるものの、他の作品に比して新しい技法の奔放な使用は抑えられており、無調まで至らないところでとどまっている。この辺りに、ドビュッシー自身が自分を出すこと制御することで、子どもに対して侵してはならない「領分」を守ったと考えられる。ドビュッシーがシュウシュウを思いやり「子ども主体」で考えようとした時に、独自の作曲技法がこういう形で表現されたとも言える。そこに、ドビュッシーの全作品の中でも少々特異であるというこの曲の位置づけがあるだろう。こうしたことは、児童学の視座から「子供の領分」を眺めたときに初めて浮上してくる新しい側面でもある。

（文責:たざわ･かおる　聖学院大学児童学科教授）